

長崎の林業

小曾根星堂書



「P.toys」の木のおもちゃ（東彼杵郡東彼杵町）

11

目次

● 林政だより	森林整備事業の業務改善について ～ドローン活用により業務の効率化を図る～	2～3
● 特集記事	佐世保市小佐々町 山の恵みを最大限に活かす 原木椎茸栽培と木炭作り	4～5
● 林業普及だより	君の将来“対馬の林業”って道もある！	6
● 地方だより・五島	高校生に向けた農林水産業説明会（新上五島町）	7
● 地方だより・松浦	松浦市石倉山の「木育」親子体験教室	8
● 林業団体情報	新たな取り組みにチャレンジ ～長崎県林業研究グループの令和2年度県内研修会～	9
● センターだより	良いヒノキコンテナ苗とは	10
● 紹介コーナー	木のおもちゃ・家具工房 P.toys	11
● 長崎の山：長浦岳560m（長崎市）		12



2020
No.782

木づかい推進で地球温暖化を防止しよう！

ご自由にお持ち下さい。

FREE

「長崎の林業」は、ながさき森林環境税により発行しています。
「長崎県庁」のホームページ「広報」→「県の発行物」からもご覧いただけます。

林政だより

森林整備事業の業務改善について ～ドローン活用により業務の効率化を図る～



ドローン実証試験中(事業者への説明)

近年のドローンを活用した取り組み

みなさんはドローンを使ったことがありますか。

近年、ドローンの技術革新が進み、高性能な機種でも私たちの手が届く価格帯になってきました。活用の幅は広く、趣味で上空からの写真や映像の撮影を楽しむ人や、産業用としても様々な分野において業務活用され、その利便性に注目が集まっており、今後ますます活躍の場が広がりそうです。

森林・林業分野でもその活用が進められ、森林の資源量調査や治山施設・危険地区の確認などの日常的な活用から、頻発している集中豪雨等による山地災害の状況確認などの緊急時の活用まで、あらゆる場面で活躍しています。



林道の被災状況確認(新上五島町)

森林整備事業の測量・申請・検査の現状

令和2年度より林野庁は、森林整備事業(民有林補助事業)においても、周囲測量や補助金申請、完成検査などの業務を効率化するために、ドローンなどのリモートセンシング技術を利用できるようにしました。

現在の森林整備事業における測量機器といえばコンパスが主流で、足場も見通しも悪い森林内を作業員2人係りで歩きながら測量するため、相当の労力が必要です。



コンパスによる測量状況

さらに、近年はより一層の補助金の適切な執行が求められており、補助金申請書類及び完成検査項目の複雑化・膨大化が進んでいます。

測量精度の向上を図りつつも、現場及び事務業務の効率化を図り、作業員の負担軽減を実現することが急務となっています。

業務改善に向けた現在の取り組み

そこで、長崎県においてもドローンを活用することができるよう、令和2年度から長崎県農林技術開発センターを中心に、実証試験を行っています。

ドローンによる作業は簡単で、森林整備事業の実施前と実施後において、施業地の上空を飛行させ、連続撮影します。飛行と撮影はあらかじめ設定した航路に沿って自動的に行われます。この空撮した複数枚の写真を重ね合わせてオルソ画像を作成し、これを用いて必要な情報を読み取り、業務改善に活用します。※オルソ画像…空中写真では中心から外周に向かうほど歪みが発生するので、ズレを正しい大きさや位置に表示されるよう補正した画像。



ドローンにより空撮したオルソ写真

森林整備事業においてドローンの活用を期待することは、大きく3つあります。

①コンパスに替わる測量機器としての役割

ドローンはコンパス測量とは異なり、1人で飛ばすことができる、森林内を歩き回る必要がないなどのメリットがあります。このため、1日かけていた測量が30分でできるという事例もあり、作業時間の大幅な縮減が見込めます。また、地形的かつ人為的な不確定

要素によらない測量であるため、測量精度の向上にも期待をしています。

②事業実施状況が一目で分かる

事業の実施前と実施後のオルソ画像を比較することにより、施業未実施の箇所や除地の有無、完了状況を確認することができます。

このことにより、1日から数日かけていた現地における完成検査を省略することができ、書類にて数時間程度で完成検査をすることができます。

③補助金申請事務の負担軽減

従来の補助金申請とは異なり、オルソ画像の提出による補助金申請であれば、多くの提出書類を省略することができるため、補助金申請書類の作成に割いていた相当の労力を削減することができます。

このように、ドローンを活用した業務改善を行うことで、業務の効率化を図り、作業員の負担軽減ができると考えています。

今後の方針について

長崎県では森林整備事業におけるドローンの活用を一部施業（主伐、人工造林、下刈り、防鹿ネット）に限定し、令和3年度から本格運用を開始する見込みです。

今後も実証試験を行い、適用施業種を拡大するなど更なる活用を模索していきたいと考えています。



ドローン(無人航空機)の機体

(森林整備室 森林整備班)



【特集記事】

佐世保市小佐々町

山の恵みを最大限に活かす

原木椎茸栽培と木炭作り

山を知り尽くす 原木椎茸栽培と木炭作り歴 40 年 まつなが しゅんじ 松永 俊次さん

日本本土最西端のまち「小佐々町」

佐世保市北部に位置する小佐々町は、「煮干いりこ」の生産量日本一を誇る水産業の盛んな町です。自然豊かな九十九島の海で獲れたばかりのカタクチイワシを、水揚げ後すぐに加工しているため大変風味がよく良質で「九十九島いりこ」として愛されています。また、平成元年に日本本土最西端の地とし認定された神崎鼻公園には、町が発行する「日本本土最西端訪問証明書」を求め多くの観光客が訪れています。その小佐々町に、きのこの専門家からも一目置かれる原木椎茸生産者がいらっしやいます。多くの農家さんから師匠と慕われる松永俊次さんを訪ねました。

大阪から地元小佐々町へ

御年 81 歳の松永さん。小佐々町の自宅から車で 10 分程の小坂こさかと呼ばれる山間地で農家を営んでいます。若い頃は大阪で香辛料の会社に勤めていましたが、高齢の両親のため地元に戻り造船所の技師として働きました。30 代の頃、元々持っていた山を活用したいと考え着目したのが、当時父が趣味で栽培していた原木椎茸。いざ始めてみると

持ち前の探究心が働き本格的な栽培を考えます。40 歳の時、父に椎茸用のクヌギを植えていいか相談し、了承を得るや否やあっという間にクヌギの植林を成し遂げました。しかしその後なかなか思うような良い椎茸が出来ず、多くの失敗も経験しました。

日本きのこセンターとの出会い

松永さんが小学生の頃は雪が多く、寒さが厳しい場所でしたが、年々雪の量も減り、今までの栽培方法が環境に適していないのではと悩んでいた頃、ふと目にした「現代農業」に載っていた鳥取県の「日本きのこセンター」に感銘を受け、早速菌を取り寄せました。すると今までにない良い品質の椎茸が出来たそうです。更に専門書を読み込み、センターの担当者から新しい情報を貰いながら試行錯誤を繰り返した結果、担当者も驚くような立派な原木椎茸を収穫できるようになりました。20 年の長い付き合いを経て、お互いの信頼関係を築き上げた成果でした。

誰も真似できない二刀流農家を実現

1000 本程の原木椎茸ほだぎの楢木から 10 月中旬～5 月にかけて約半年間収穫し、スーパーや直

売所に出荷します。原木はクヌギ、シイ、クリ、マテ、コナラ等ですが、木全体の形成層が栄養分であるクヌギが一番適しているそうです。



植菌後、約1年半経過した楢木

(左)コナラ 芯の中心部まで菌が入っていない
(右)クヌギ 固い芯がないので菌が全体に回る

その出荷後の合間にと奥様から頼まれたのが「木炭作り」です。中学生の頃、父の炭焼きの手伝いを通しコツは習得していました。当初は自宅で使う分だけを焼いていましたが、評判を聞いた人たちからの依頼が年々増えていったそうです。松永さんの木炭は大変良質で長年のファンが多く、今では12月だけで1tもの木炭が売られています。



(左)窯の入り口を粘土で塞ぎ2週間冷やす
(右)出来上がった木炭の窯出し作業

山に入り10日かけて木を伐採し運び、大きさを揃えた後、更に3日間かけてお手製の窯に詰め火を入れます。800℃の高熱で1週間かけて蒸し焼きにし、その後2週間かけてゆっくりと冷ました木炭は焼く前の半分にまで引き締まります。今回は軽トラック約11台分の木を窯入れし、500kg程の木炭に仕上がりました。通常使う木は、暖房や囲炉裏用のカシ、炊飯やBBQ、魚焼き用などでタブ、シイ、イタドリなどの雑木。今回

は最高品が出来るヘコハチや、知り合いから貰った珍しいツバキも入っていました。

楽しみに待つお得意さんのために

松永さんは木の伐採から運搬、窯入れ、火の管理、窯出し、そして出来上がった木炭を同じ大きさに切り揃え梱包し出荷、お得意先や個人宅への配送まで全て一人で賅っています。加えて、窯に火が入っている間は夜中でも様子を見に行くそうです。木炭作りは大変な重労働です。「毎年楽しみに待ってくれる人がいるから。」と話し、見せてくれた松永さんの手は、長年の作業の積み重ねによって出来たマメやタコで厚みを増した立派な「職人の手」でした。

自然と共存する農林業を

山と関わり続けて40年の大ベテランも、以前は野生の猪から植菌後の楢木を荒らされる被害に悩んだこともあったそうです。そんな時、駆除ではなくまずは原因を探り、「お互いにとって良い方法を。」と考え、枕木を直接土の上に並べるのではなく、下に空間を作りました。その空間に猪が入れるようにし、土の中にあるミミズを食べやすくしたのです。するとそれ以来、被害が出ることはなくなりました。 猪のための空間



木炭の切り分けをさせてもらった際、大量の切りくずや炭の粉が出ました。廃棄するのか尋ねたところ、そこにも松永さんのこだわりを発見。それらを集めて袋に詰め、佐々町にある茶園に配達していました。そこでは茶畑に撒いて土と混ぜ、肥料にしているそうです。「木炭は捨てる所がないよ。」と話す言葉通り、山の資源を活かし大切にしたいという思いが伝わってきました。自然の命を尊重し、共存の道を選んだ松永さんはまさに山のエキスパートだと感じました。

(NPO 法人地域循環研究所)

林業普及だより

君の将来“対馬の林業”って道もある！

対馬の森林

長崎の北西に位置する、国境の島『対馬』。島の9割を占める豊富な森林資源を活かし、昔から木材の生産や原木しいたけ栽培が盛んです。さらに、農業や水産業も森林からの恩恵を受けて営まれており、今でも人々の暮らしと共にあります。

対馬の林業

島内の人工林の3分の1は伐採時期を迎えており、令和元年度のスギ・ヒノキの木材生産量は、約7万m³で、県内の4割を占めています。また、地の利を活かした輸出も盛んで、韓国や中国に約6,300m³を出荷しています。

対馬で林業を実施する事業者の方々は急斜面の山が多い中、森林を守りつつ効率的な木材を生産するため、試行錯誤しながら日々作業されています。



輸出のための船積み

産業を支える人材の確保

対馬の人口は、現在3万人を切り、減少の一途を辿っています。また、高齢化も進み、様々な産業を支える人材不足が大きな課題となっています。

そこで、対馬市と対馬振興局で、地元の学生やUターン者向け等に合同企業説明会、お仕事説明会、対馬ぐらしフェア、小中高校での1次産業学習等、年間20回を超える様々なイベントを開催しており、その殆どに林業関係も参画し、人材確保に努めているところです。



対馬合同企業説明会

対馬グローバル大学開校

対馬にゆかりのある専門家や島内外の実践家が講師となり、環境・社会・経済・ビジネス等幅広く学ぶ機会を市民に提供し、将来の対馬を担う人材育成を進めるため、今年9月に「対馬グローバル大学」が開校しました。

「web 講義」「オンラインゼミ」「仮想研究室」の3つを柱に、時代に合わせたオンラインの活用により場所を選ばない学びのスタイルで、対馬の自然や歴史、産業や地域づくりなど幅広く学ぶことができます。もちろん林業の講義もしています。



対馬グローバル大学講義の収録

対馬出身の県林業職員、糸瀬・斎藤コンビも、対馬の林業の魅力を伝える講師として大活躍！

*** 詳しくは、こちらへアクセス↓↓ ***

<https://tsushimaglobal-u.com/>

最後に

対馬の大自然の中、林業で働きたい方を募集中です。魅力ある「対馬の林業」の未来と一緒に描きませんか？

(対馬振興局 林業課)

地方だより

高校生に向けた農林水産業説明会(新上五島町)



講義風景

9月17日(木)、長崎県立上五島高等学校において、農林水産業の説明が行われました。

この説明会は、1年生102名を対象に農林水産業を将来の職業選択の1つとして考えてもらうことを目的に開催したもので、新上五島町内で実際に働かれています方を講師として農・林・水産業についてそれぞれ20分ずつの講義がありました。

農業では、五島灘酒造株式会社の方が、さつまいもを栽培し、加工、醸造して焼酎を一貫して生産されている話があり、水産業では、1ターンで移住された方が1日の仕事内容等についての具体的な話や上五島の水産業の魅力などを話されました。



新井普及指導協力員による講義

林業では、長崎県森林組合連合会の田中さゆりさんが林業の仕事について、林業普及指導協力員である五島森林組合上五島支所の新井^{ひろかず}宏和さんからは、利用間伐の作業(伐倒、造材、集材運材や船への材の積込作業)等について自主作成された動画を活用して説明されました。

講義のときには、「台風後の風倒木は木材として使うことができるのか?」「林業の仕事をするには、どんな資格が必要か。」との質問があり、また森の奥でこのような作業をしていることを初めて知ることができて良かったなどの感想がありました。

講義後には、VR(バーチャルリアリティ)による伐倒シミュレーションを学生12名が体験しました。



VRによる伐倒シミュレーション体験

講義後のアンケートでは、99%が農林水産業に興味があったと回答。将来林業の仕事に就いてみたいかとの質問に対し、19名(20%)が就いてみたいとの回答がありました。

今回の講義を通じ、林業を知ること興味をもつことができ、就職してみたいと思う生徒もいることから、今後もこのような機会を作り、いつの日か林業の担い手として携わってもらえたらと思います。

(五島振興局 林務課)

地方だより

松浦市石倉山の「木育」親子体験教室



森林体験教室及び木工体験教室

8月22日(土)、松浦市今福町の「四季の森石倉^{いしくら}」において、松浦市主催で「森林・木工体験教室」を開催しました。

松浦市教育委員会と松浦商工会議所青年部の共催と長崎北部森林組合の後援を受け、市内の小学校に通う1～3年生の親子を対象に1回約30組の教室を3回に分けて開催し、約100人が参加しました。

松浦市では、平成30年度から「木育」を推進しており、令和2年2月に、長崎県内初のウッドスタート宣言をし、子どもから大人まで、木の温もりを感じながら楽しく豊かな暮らしを送ることができる取り組みを行っています。

この教室は、その一環として、ながさき森林環境税を活用したふるさとの森林づくり事業により実施しました。

会場となった「四季の森石倉」は、伊万里湾が一望でき、サクラやツツジの花見の名所として市民の憩いの森になっています。

まず、参加者には森林体験教室に参加してもらい、長崎北部森林組合職員を講師として、森林の果たす役割や環境の循環、植林・間伐・活用などについて学んでもらい、親子で森林への関心を深めてもらいました。

続いて、木工体験教室では、木の活用の作業を体験してもらうために地域の木材から制作した木製キットを使い、木製ラックづくりを行いました。

さらに長崎北部森林組合のブースでは同組合提供の端材を活用し、完成した木製ラックのアレンジや新たに作品を制作するなど、大変賑わいました。



木製ラックアレンジコーナー

松浦商工会議所青年部のブースでは、「アジフライの聖地」松浦市らしく、アジフライをかたどった板にカンナくずを貼り付けるモニュメント製作やマイ箸づくりなどが行われました。



アジフライモニュメント

参加者には、石倉山の自然の中で、親子で思う存分一緒に木の香りを楽しんだり、木のぬくもりを感じたりと普段あまりできない体験を満喫し、自分で何かをつくりあげる喜びも感じてもらいました。

今後も、松浦市では、このように市民の皆様に身近に自然を感じてもらう機会をたくさん設け、心豊かな生活ができる市を目指していきたいと思えます。

(松浦市 子育て・こども課、農林課)

新たな取り組みにチャレンジ ～長崎県林業研究グループの令和2年度県内研修会～



長崎県林業研究グループ連絡協議会では、長崎県の森林環境税の助成を受けて8月6日から7日の2日間にわたり、長崎市内のホテル・長崎県民の森で令和2年度県内研修会を開催しました。

林業研究グループの研修は毎年実施しており、研修会を通じて新たな林業技術の勉強や自分たちの活動実績発表、現地研修会を通じて交流が図られています。今年度は25名が参加しました。

第1日目は座学研修

第1日目は、長崎市内のホテルセントヒル長崎での座学研修でした。開会にあたり尾上会長、来賓の内田林政課長が挨拶しました。

挨拶の後、対馬市のニホンミツバチ部会長の扇次男さんの講演を聞きました。蜂蜜は特用林産物で林業研究グループでも新たな取り組みとして蜂蜜採集にチャレンジしようと翌日に長崎県民の森で巣箱作りを予定しており、熱心に聞き入りました。

続いて対馬林業研究会の吉田永さんの「^{そま}仙人だからできる地域貢献」の研究発表がありました。今年の9月に武雄市で開催される予定だった九州地区林研発表大会に出場予定の発表でした。ところが、新型コロナウイルス感染症の影響で中止されて書類審査になりました。

3番目の実績発表は、佐世保林業研究会が地域の木工業者と連携して製作した地域材活用の家具等製作の岡さんの活動の報告です。

「県産地域未利用材活用促進研究会」という団体を立ち上げ、製作された物をみた佐世保市がふるさと納税の返礼品として決定。会としての活動に弾みがつきました。

初日最後の講演は、真樹フォレスト株の佐賀里政則事業部長の講演でした。民間林業経営者らしく分析力やさすがと思わせた経営手腕に感心しました。成り立たなくなった林業経営と評しながら、ハラン栽培や森林管理事業に進出し、とにかくポジティブ・前向きな姿勢に圧倒されました。

第2日目は県民の森で蜂巢箱作り

新たな特用林産物づくりを目指して、蜂蜜採集用の巣箱づくりに挑戦しました。重箱式巣箱づくりに四苦八苦しながらも完成。

昨日講演された扇さんに、巣箱の設置から誘引方法・蜂蜜採集の仕方を学びました。



(長崎県林業研究グループ連絡協議会)

センターだより

良いヒノキコンテナ苗とは

はじめに

植林用の苗は全国規模でコンテナ苗の生産に転換しつつあります。コンテナとは一つの容器に苗木を育てる孔がたくさんついているもので、コンテナで育てた苗をコンテナ苗といいます。しかし、これまでの苗畑における普通苗生産とは管理手法が異なるため、生産技術はまだ確立していません。

根の張る空間（以下根鉢と言う）の容積が一定に制限された状態で苗高・根元径と県種の苗規格にあった苗に育てることの難しさは、以下の点にあります。

- ・苗木の植栽間隔が狭く、下枝が張らず徒長気味になりやすいこと。
- ・根鉢容積が物理的に小さいため、太りが制限され、根元径の成長が緩慢なこと。
- ・規格をクリアしても樹高と根元径のバランスが良いとは限らないこと。
- ・根鉢内の細根（白根）を偏りなく全方向に発根させることが難しいこと。

苗木のバランスについて

コンテナ苗のバランスを把握するには形状比が一つの指標となります。

ここでの形状比はcm単位で樹高を根元径で割り算した数値と定義します。

スギは他県での植栽事例では形状比 80 がバランスのとれた自然な形であろうと報告されています。

ヒノキについてはどうでしょうか。雲仙市に植栽したヒノキコンテナ苗の形状比の変化を追跡してみました（図1）。

様々な形状比のグループが徐々に形状比 65 ~ 80 の範囲に収束する傾向が見られます。ヒノキもまたスギ同様、形状比 80 以下がバランスの良い苗木と考えて良いでしょう。

細根（白根）の充実について

形状比のほかに目視で確認できるのはコンテナから引き抜いた根鉢の表面でしょう。細根が白く覆っていますが、後ろを見ると土だけの部分が目立つというのは良くありません。

細根の発根促進作業は、普通苗では苗畑で1~2度の床替えで根切を行い、成長をコントロールしながら行っています。出荷時の根拵えも同様です。コンテナ苗では、空中根切が細根の発根に効果があるとされていますが、コンテナの配置換えや施肥、灌水の量・頻度の工夫がないとうまくいかず試行錯誤が続いているのが生産現場の実情です。

終わりに

苗木を生産する側も、使用する側も、良い苗木とはどんなものか意識することで、さらに良い苗木の生産技術の向上が図れると考えています。

（農林技術開発センター）

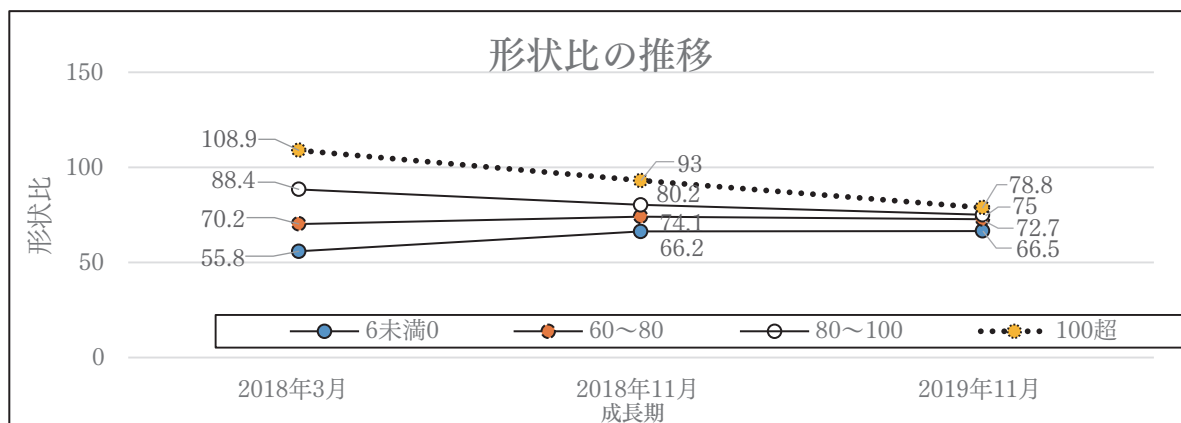
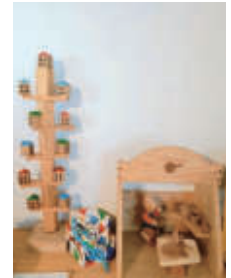


図1 ヒノキコンテナ苗形状比の経年変化（数値は各形状比グループの平均値）

紹介コーナー 木のおもちゃ・家具工房 P.toys



大村湾が目前に広がる松林の中にポツンと佇む一軒家カフェ「おっぷら」。二十六聖人上陸の地である東彼杵町宿郷にあるその店内の常設ギャラリーには、オーナー自ら手がける「P. toys」の木のおもちゃが展示販売されています。元々海水浴場だったこの地で長年愛されてきた海の家を家族でリノベーションし、令和元年にカフェとして生まれ変わりました。海を眺める店内には優しい光が差し込み、温かな木の温もりに溢れた癒しの空間となっています。お客様用のテーブルやイスは勿論のこと、店内全ての家具は用途に合わせて使いやすく工夫された「P. toys」特製のものばかり。また、久留米や大川から取り寄せ



るブナやケヤキ、カツラ、タモなどの木材で作られるおもちゃは元々オーナーご夫妻がご自身のお子さんのため安全に楽しく遊べるものと考え作られたものだそう。ドールハウスや恐竜を模ったジグソーパズル、持ち運べるままごとキッチンなど思わず手に取りたくなるような「P. toys」の作品たち。使う人への想いが詰まったおもちゃや家具に囲まれた笑顔溢れるカフェを一度訪れてみませんか。

P. toys (カフェおっぷら内ギャラリー)
 長崎県東彼杵郡東彼杵町彼杵宿郷 348-18
 TEL/FAX : 0957-56-9938
 営業時間 : 11時～日没 30分後まで
 定休日 : 不定休 (要確認)
 f @ptoys または @cafehoppa

伊万里木材市況

【ヒノキ】

令和2年11月現在

長さ	径級 cm	等級	高値 (円/㎡)	現在出荷量	現在引合	需要見通
4m	16～18	直	19,600	普通	多い	普通
	16～18	小曲り	18,500	普通	多い	普通
	20～22	直	19,000	少ない	多い	普通
	20～22	小曲り	18,200	少ない	多い	普通

【スギ】

令和2年11月現在

長さ	径級 cm	等級	高値 (円/㎡)	現在出荷量	現在引合	需要見通
4m	18～22	直	13,300	少ない	多い	多い
	18～22	小曲り	12,000	少ない	多い	多い
	24～26	直	13,500	少ない	多い	多い
	24～26	小曲り	12,000	少ない	多い	多い

※情報・お問い合わせは、伊万里木材市場 電話 0955-20-2183 まで

長崎の山：長浦岳560m（長崎市）



時津町から撮影した長浦岳

^{ながうら}長浦岳は西彼半島の中心に位置し長崎県民の森東ゲート付近から登ることができます。長浦の地名は、海が湾曲して岸辺が入り込み、長い海岸線を持っていることに由来していると考えられています。長浦岳は今では山全体がヒノキの植林地になっており、この山の東半分は国有林、西半分は県行造林地（穴似田団地）と大別できます。県行造林地とは県が市町村や個人の土地などに植林し育林することです。

ヒノキの植林地になる以前の長浦岳の歴史を知るため、地元にお住まいの堀義朗さん（85歳）をお訪ねしました。堀さんは長浦岳はかつて「宝の山」だったと語ります。それはどういうことなのでしょう。

昭和20年代当時、西彼半島は陸の孤島と呼ばれ、西海橋もなく佐世保市と長崎市を結ぶ道路はありませんでした。そのため物資輸送は水運に頼るしかありませんでした。農耕用に牛が各農家で飼育されていた時代です。

昭和25年頃、長浦岳の国有林ではアカマツ材の払い下げがさかんに行われていました。業者に払い下げられた木材は、大村湾に面した集積所に集められ、船で北松浦郡の炭釜まで、坑木として運送されました。当時の堀少年は、休日ごとに自宅の牛を連れて長浦岳で生産された木材を集積所まで何回も運んだそうです。また別の機会には周辺で生産された木炭一俵（約20kg）を担いで11km先の

集積所まで運んだこともあったそうです。木炭は船で消費地の長崎市に運ばれました。当時の暮らしは今ほど豊かではありませんので大変な作業ではありましたが木材や木炭の運搬による現金収入は、農家にとって大切な生活の糧だったに違いありません。長浦岳はまさに宝の山でした。

県行造林の穴似田団地は、現在では「ハイブリッドの森」と名前が付けられています。ハイブリッドの森とは企業が社会的責任（CSR）を果たすため適切な管理をしている森林です。具体的には、長崎トヨペット㈱、ネットヨタ長崎㈱の両社が企業が取り組む森づくりとして、作業道作設や間伐などを森林組合に委託し、平成22年度から平成28年度にかけて、合計36.29haの森林整備を実施し、591.344m³の木材を生産しました。

また、ハイブリッドの森を活用した森林環境教育も行っています。整備する事により二酸化炭素の吸収に貢献し、森林環境保全の意味を伝える場でもあります。長浦岳は森林の持つ多面的機能を発揮している森林といえるでしょう。



ハイブリッドの森 看板

（NPO法人地域循環研究所）

長崎の林業 11月号 第782号
 編集・発行 長崎県林政課
 住所：長崎県長崎市尾上町3番1号
 電話：095-895-2988
 ファクシミリ：095-895-2596
 メールアドレス：
 s07090@pref.nagasaki.lg.jp